

## 「首折れ石仏」考 首折れ羅漢像は廃仏毀釈が主要因か

杉浦正和

### 1. 初めに ～「首なし石仏」考における探究～

2012 年度『教員研究紀要』ではタイトルを「『首なし石仏』考」としたが、修復で首がつけられることも多く、また起こった事実を端的に示すという意味で、「『首折れ石仏』考」と改名して研究を進めることとする。

日本寺を訪問して驚かされたのは、石造の千五百羅漢像の大半に首の折られた痕があることであった。これに驚いていろいろ調べ始めると、首がなくなったまま、あるいは首の折れた痕を残した石仏、つまり羅漢像や地蔵などが全国各地にたくさん存在することが分かったのである。現在は、一般市民が観光の折に写真をとり解説やコメントを入れた、「観光ブログ」と呼ぶべきものが多数ある。ネット検索をかけると、こうした「観光ブログ」の写真や文章から、日本全国の石仏の現状や首折れの推測理由を見ることができる。理由として最も多いのが、明治初めの廃仏毀釈であった。看板やパンフレットにあった記述を写しているケースと、仏教関係のものを壊すというイメージがあってそこに理由を見いだしているケースがある。改めて廃仏毀釈の実態も調べようと思った。

2012 年度の論考では、まず五百羅漢像の首折れに関して全国の状況を簡単に示した。そこから検討した首折れ理由の仮説は、地震による倒壊と、廃仏毀釈時の人的破壊、俗信や迷信であった。地震倒壊仮説は、川越の喜多院において関東大震災後に多くの首がころがっていたという記録が存在するものの、首が折れるだけでなくもっと大きな壊れ方をする場合も多いはずであり、首折ればかりが残るという状況を説明できない。

廃仏毀釈時破壊仮説は、文献的な記録を見る限り、堂塔の破壊や内部にあった仏像仏具の破棄・売却、石仏や石塔が倒され埋められると述べられるものの、石仏が破壊されたという記述があまり見つからない。むしろ、民衆が仏像や石塔を保護したという事例があった。当然破壊もあったと思われるが、その場合は首折れで止める理由が必要となる。

俗信・迷信仮説は、日本寺にほぼ限る仮説である。地元鋸南町のサイトには、茂太郎という者が羅漢像の首を盗んだという「首なし羅漢の伝説」を紹介して、「自分の思う人に似た首があり...その首を取ってきてひそかに供養すると、願い事がかなうという迷信」があって盗まれてきたと説明する。ところが、これは伝説ではなくて、中里介山の『大菩薩峠』の「安房の国の巻」という小説において、船旅で話されたこととして「生ける人ならばその思いが叶い、死んだものならばその魂が浮ぶ」と紹介されている。他方で、茂太郎というのは中里介山の小説に出てくる重要人物なのである。鋸南町サイトの話と『大菩薩峠』の関連がどのようなものかは分からないものの、他の地域でこうした俗信仮説がほとんどないので、日本寺の首折れ石仏の大きな特徴とは言えるだろう。

今回の報告では、こうした仮説にもう一度検討を加えるとともに、他の仮説や道祖神像などの状況についても検討したい。

### 2. 日本寺の羅漢像をめぐる迷信・俗信の影響

日本寺はたびたび火災にあって、史料が十分に残っていないと聞いている。そこで、文学者などが日本寺を訪れた時に記録したものがないかを探ってみた。

## 夏目漱石と正岡子規

日本寺は、公式サイトで文人がよく訪れる場所になっているとして、夏目漱石の漢文紀行『木屑録』と正岡子規の「かくれみの」を紹介する。夏目漱石は1889年8月22歳で千葉県を旅行し、鋸山に登って五百羅漢像を見て漢詩を正岡子規に送る。その2年後3月、23歳で正岡子規も千葉県を旅して日本寺を訪れ漢詩を作っている。夏目は「...ああ嘆かわしいかな一千五百年、十二の僧院虚しくあとなし」(現代語訳)と寺の荒廃を嘆く漢詩をつくり<sup>1</sup>、鋸山に登った様子の中で羅漢像が造られたことを述べて以下のように記し、壊れた羅漢像があることと、互いに似ることのない様々な容貌のものがあると述べている<sup>2</sup>。

上遙見石仏雜然列于巖上欲走而就之而峯迴路轉忽失之如此者數次數刻之後始得達像高大者三尺小者一尺或眉目磨滅不可弁或為遊者所毀損失頭首四肢而其完者姿態百出容貌千狀無一相似者..... (原文は旧漢字、施線は引用者)

「遙に石仏の雜然として巖上に列れるを見る、走って之に就かんと欲すれば、峯迴り、路轉じて、忽ち之を失ふ、此の如きこと數次なりしが、數刻の後、始めて達するを得たり、像の高さ、大なる者は三尺、小なる者は一尺、或は眉目磨滅して弁ずべからざるあり或は遊者に毀損せられて、頭首四肢を失へるあり、而して其完き者は姿態百出し、容貌千狀にして、一の相似たるもの無し.....」 (『朝日新聞』1993年08月27日)

夏目漱石は羅漢像の壊れた様に気づいている。しかし、1889年時点ではその数がひどく多くはなかったといえそうである。正岡子規は、4月2日に鋸山に登って以下のように記すものの、鋸山と題した漢詩では羅漢像の壊れについて取りあげていない<sup>3</sup>。

石仏幾百。或群居。或孤独栖。安座而怒者。欲墮而笑者。仙氣撲人。踞仏側者少時。..... (原文は旧漢字、施線は引用者)

## 日本寺や羅漢像について書いた明治・大正の文人たち

この他に、千葉県について書かれた文章を集めた戦前の本から<sup>4</sup>、日本寺について述べたものを三つ取り上げたい。詩人、歌人、随筆家、評論家として著名だった大町桂月の『總房の山水』(1909年)。ジャーナリスト、政治家として活躍した徳富猪一郎(徳富蘇峰)が1926年6月の旅行について記した「房州二日記」<sup>5</sup>。そして、1921年元旦から『都新聞』(現東京新聞)で連載された中里介山の『大菩薩峠 18 安房の国の巻』である<sup>6</sup>。

溪流に沿い石径をよづること七八町にして日本寺の廢宇を得たり。一個の仏像さびしげに壇上に残れるのみにて、堂のあばらなるが柱と柱との間に、繩を引きて煙草の葉をほせるなど、仏縁つきてすでに久しきを知る。...せめて五百羅漢を見ながら、頂ま

<sup>1</sup> [http://www.nihonji.jp/souseki\\_shiki/](http://www.nihonji.jp/souseki_shiki/)

<sup>2</sup> 『漱石全集 第十四巻』漱石全集刊行会、1937年、pp439-447、p442に羅漢像の記述。

<sup>3</sup> 『子規全集 第8巻(少年時代創作篇)』アルス、1925年、pp245-263、p250に羅漢像の記述。

<sup>4</sup> 房総観光協会 編『文壇人の観たる房総』房総観光協会、1933年、pp61-65

<sup>5</sup> 徳富猪一郎(徳富蘇峰)『関東探勝記』(蘇峰叢書；第7冊)民友社、1928、pp145-6

<sup>6</sup> <http://www.aozora.gr.jp/cards/000283/card2934.html>

で上りて十国を一目に見おろさむと思ひたれど、…… (原文は旧漢字、施線は引用者)

先づ鋸山の半腹なる乾坤山日本寺に詣した。…鋸山は鋸の齒の如く、海に向かって立っている。山は概ね凝灰岩か、若しくは砂岩らしく見受けた。…堂は荒れ、且つ傾いている。丹色に塗りたる柱や扉は、半ば剥げている。転じて本坊に赴けば、近頃修繕したものと覚え、茅屋根は新しくある。…… (原文は旧漢字、施線は引用者)

その話のうちで最も多く一座の興味を惹いたのは、鋸山の日本寺の千二百羅漢の話でありました。その千二百羅漢のうちには必ず自分の思う人に似た首がある。誰にも知られないようにその首を取って来て、ひそかに供養すると願い事が叶うという迷信から、近頃はしきりにあの羅漢様の首がなくなるという話が、誰やらの口から語り出されると、一座の興を湧かせます。羅漢様の首を盗む者のうちには、妙齡の乙女もある。血の気に燃え立つ青年もある。わが子を失うて、その悲しみに堪えやらぬ母親もある。最愛の妻を失うた夫、夫を失うた妻もある。そうして一旦盗んで来た首をひそかに供養して、更に新しい胴体をつけて、また元へ戻すと、生ける人ならばその思いが叶い、死んだものならばその魂が浮ぶ…という話が興に乗った時分には、……日本寺の千二百羅漢に次いで、芳浜の茂太郎なるものが多少でも問題になることは、それが何かの意味で土地の名物でなければなりません。 (施線は引用者)

とからは、20世紀初頭の日本寺の荒廃ぶりがよく分かるものの、羅漢像の首折れなど壊れた様に関心がない。この事実にも最も注目したのが中里介山であり、2012年度論考でも取りあげた が問題の俗信に関する記述である。鋸南町の公式サイトでは、「首を取って来て、ひそかに供養すると願い事が叶うという迷信」が生まれたと述べ、吉浜の茂太郎という者が、病気になった庄屋の娘を救うため3体の羅漢像の首を取ったという話があり、それが変化して伝えられた結果として説明している<sup>7</sup>。これを昨年度の考察では、「小説が流行ってそこで語られたことが俗信として広がった、ということが考えられないことではない」と述べつつも、「もう一つの可能性がある。それは、この話が単なる小説家の創造したものでなくて、地域の俗信から生まれてきた可能性である」とした。

『大菩薩峠』の記述と地域の俗信はどちらが先か

改めて『大菩薩峠』を調べると、確かに茂太郎は重要な人物として描かれているが、それはこの「18 安房の国の巻」以降のことであり、3つの首を取ったという話自体が『大菩薩峠』に存在せず、伝聞として述べられているにすぎないことが分かった。とすると、鋸南町サイトの説明のように、まず茂太郎に関係した俗信・迷信が存在していて、中里介山がその話を借用して、茂太郎を重要人物として小説で使ったというべきなのである。

とすると、他の地域ではこのような俗信がほとんどないのに、なぜ安房でのみこうした俗信が生まれたのかが、研究課題ということになる。関連して、もう一つの俗信を取りあげておく。二三の「観光ブログ」でも述べられていた首折れの理由で、博打をやる者の俗信である。「羅漢像の欠片を飲めば博打に強くなれる - との噂が博徒達の間には流布していた

<sup>7</sup> <http://www.town.kyonan.chiba.jp/kyonan/tyouhou-rekisi/rekisisiryoukan1.htm>

の。鎌倉ではお地蔵さまの首がターゲットにされていたけど同じ理由ね。」とある<sup>8</sup>。刑罰としての晒し首のように生命力を絶ったことを誇示するのではなく、折れた首に何かの力を期待するという俗信は、晒し首の逆の発想として生まれるのか検討せねばならない<sup>9</sup>。ここで、日本寺から石仏を持ち去る盗難事件があったことを紹介しよう。1997年10月8日の『朝日新聞』千葉版の記事で、59体の石仏盗難が報告されている。5月には賽銭箱が盗まれていて、1996年3月にできた町道の鋸山観光道路を通過して駐車場まで来て、東口付近の山の斜面から侵入したようだ。この記事に日本寺の状況が以下のように述べられる。

現在、ほとんどが高さ1.3メートルほどのステンレス製のさくで囲まれており、直接触れることはできない。かつては参拝者は自由に石仏に触れることができたが、昭和30年代に三体が盗まれたため直後に同寺がさくを設けたとされる。藤井住職によると、さくを設けた以降は石仏の盗難はなかったという。...千葉市内の古美術商によると、一般の人が石仏を購入するのは飾りとして庭などに置くためが多く、1970年代前半の一時期にはブームになったこともあったという。しかし、「最近はそんなに売れるものではない」と話し、犯人たちの意図をいぶかっている。ただ、小物の骨とう品は近年、品薄傾向にあり、業者が商品確保のために買い取ることはありうる、と見る。また、全国各地で盛んになっている骨とう市に出される可能性も..... (施線は引用者)

住職の説明が正しければ、1960年代以降は首折れ石仏が増えなかったことになる。また、石仏の人気だった時代が、1960年代半ばから1970年代にかけて骨董品や庭の置物のニーズとして存在したのである。しかし、この場合は首を折るなどの破壊に結びつかない。

### 3. 日本寺における廃仏毀釈と石仏破壊状況の検討

#### 参道改修記念碑から分かる世界救世教の関わり

日本寺は、そのパンフレットに「惜しくも明治維新の排仏毀釈以来、荒廃したままで現在に至り、目下『羅漢様お首つなぎ』を初め、全山の復興に努力しております」と説明している。ウィキペディアで廃仏毀釈を調べると、「例えば千葉県鋸山には五百羅漢像があるが、全ての仏像が破壊された」とあり、日本寺は破壊の象徴とされている。まず、日本寺の首折れについて、重要な写真とともに理由を考察しているサイトで検討しよう<sup>10</sup>。

そこに1981年に造られた「参道改修記念碑」の文章が引用され、「徳川幕府の倒壊王政維新の成るに及んで廃仏毀釈の流弊は当山に致命的悲運をもたらし、全山全て荒廃に帰し、安置した仏像の多くが破壊されたのも実にこの間のことである」とあり、さらに1939年11月の失火や「日華事変に続く大戦の勃発は衆生済度の仏縁を断って全山」が要塞と化されたことが述べられる。この碑の謂われは、「当山往時の参道は当山の石(第三紀層の凝灰岩山塊)にて造成されしもの故、石質甚だ軟弱なために多年の風水の浸蝕及び多数の参詣者の通行に依って摩滅損傷凹凸激しく、殆んど全域に亘って通行極めて難渋の状態にあり、

<sup>8</sup> <http://myluxurynight.com/kanto/nokogiriyama-01/nokogiriyama-01.html>

<sup>9</sup> 小川直之「斬首の民俗 廃仏毀釈と石仏」『歴史民俗論ノート 地蔵・斬首・日記』1996年、pp31-43で、頭首が失われた石仏の理由が、廃仏毀釈時の石仏や石塔の片づけ奨励と、折口信夫にしたがって靈魂・精霊の復活を防ぐ心意として論じられている。

<sup>10</sup> <http://myluxurynight.com/kanto/nokogiriyama-01/nokogiriyama-01.html>



関係者の久しく憂うる処であった。この度その参道が世界救世教の寄進に依り階段数 2,639 段、踊場数 159、総延長 2,700m に亘って大改修され、その殆んどが御影石・鉄平石張りの堅固なものとなり、且、排水施設・安全施設等も万全に整備された」とあり<sup>11</sup>、当時世界救世教から寄付のあったことが分かる。

山頂エリアにある十州一覽台には浅間神社があり、そこには世界救世教記念碑が立てられ、こう書かれてある。「この碑は、昭和 6 年(1931)6 月 15 日、世界救世教岡田茂吉教祖の受けた天啓を記念して建立したものである。岡田茂吉教祖は、神示に依り昭和 6 年(1931)6 月 14 日、20 数名の弟子と共に当山に登り、曹洞禅宗の名刹、関東最古の勅願所たる乾坤山日本寺に拝宿し、翌 15 日未明、当十州一覽台山頂に立って東天に昇る旭光を拝し...大宇宙の夜昼転換という神の啓示を受け、人類救済と地上天国建設の大使命を感得した。かくて教祖はこの天啓に基づき立教の準備を整え、昭和 10 年(1935)1 月 1 日日本教を創立した。...この地を本教聖蹟と定め、日本寺の好意により、昭和 40 年(1965)6 月、「天啓聖蹟」碑を建立したものである。昭和 56 年(1981)12 月吉日 宗教法人 世界救世教」。世界救世教にとって日本寺は重要な聖地だったので、多額の寄付をしたのである。

#### 1931 年に羅漢像を歌った世界救世教教祖の短歌

次に、この 1931 年の岡田茂吉師の日本寺参詣を説明したサイトを見てみよう<sup>12</sup>。そこでは、山頂の神事に言及した後に岡田茂吉師の短歌「心なき 人の多きも立ち並ぶ 羅漢の半数首の無きかな」を示し、三つの首折れ羅漢像の写真を掲示して以下の説明をつける。「明治維新後には、廃仏毀釈や迷信、俗信から多くの石造の首が落とされました」「現在そのお首のお繋ぎ、修復の地道な作業が続けられています」「10 年程前には石仏の盗難が相次ぎました。アジアの某 C 国にて、日本寺と刻まれた石造多数が発見されましたが、その返還交渉は頓挫したままです」と。これらから、第一に、大雑把な記述であるものの、1931 年時点で羅漢像の首が半分なかったこと。「首なし羅漢」と言われることも多いので、大戦前に半数と明示した文章の存在することはきわめて大きな意味がある。第二に、中国観光客など様々な盗難のあったらしいことが分かる。現在は大半の像に首折れの痕が残っているので、1930 年代の半分の状態から増えたと考えられる。これは、盗難の形で少しずつ首折れが増えたことを意味し、俗信による盗難の影響度が高いと言える。実際、数十年前に盗難したことを謝罪した石碑とともに、返還された石仏が一つ置かれてある。

廃仏毀釈による暴力行為で全ての羅漢像が壊されたと想像することは、思い込みによる誤った想像であることが、この短歌によって明確に証明されたと考えられる。

#### なぜ日本寺が廃仏毀釈・石仏破壊の対象にされたのだろうか

また、廃仏毀釈の背景を考えると、日本寺がなぜ破壊の対象となったのかが分からない。旧『千葉県史』は、千葉県下で最も廃仏毀釈が激しかったと言われる香取神宮を取りあげて「尚古隊」と、安房郡については「神職隊」を以下のように説明する<sup>13</sup>。

<sup>11</sup> ここで日本寺の洞窟などの石質が軟弱であると述べられるが、羅漢像の石材は伊豆からわざわざ取って来られた。雨水の影響で脆くなりやすいと誤解してはならない。

<sup>12</sup> <http://katuou.web.fc2.com/nihonji.htm> 世界救世教の創始者である岡田茂吉師が旅した所を写真付きで詳しく説明するサイト。1931 年 6 月の日本寺参詣を追体験する形で説明される。

<sup>13</sup> 『千葉県史明治編』1962 年初版、1989 年三版、p700、p709-710

明治維新の時の香取神宮では、神職によって「尚古隊」なるものが編成され、専ら軍事訓練を行ない、大宮司香取保礼、大禰宜香取国雄がこれを指導して、尊王の熱意を示すと共に、一面仏教関係の図像堂塔等を破壊しました。……

…房総では安房の神官が中心となり、神職隊を組織するという著しい活動がみられました。これは大井の(館山市)手力雄神社の神主石井石見が中心となって「房陽神風隊」なるものを組織し大井の明王院に事務所を置き、安房郡各地の神官・農民がこの隊員として参加しています。…隊員は武技を練り、腰越狐塚に学舎を設けて学事を研究し、明治の新政に当たって叛乱者の動きに備え、盗賊や暴民を逮捕鎮撫することを目的とするもので、明治元年(1868)征夷大総督有栖川宮熾仁親王が江戸に向かった時に計画されたものです。 (施線は引用者)

この記述を見る限り、神宮寺の管理下に置かれていた香取神宮では、神官の反発が激しくて図像堂塔等の破壊のあったことが分かる。似た神官の活動が安房でもあったが、地域は日本寺より南の館山市周辺であり、目的が廃仏でないことも明らかである。さらに、香取神宮では、神宮寺と呼ばれた金剛宝寺が、堂塔や本堂、三重塔、鐘楼、山門など全ての建物が破壊される代わりに、本殿と拝殿などの神社関係の建物が増設されている。これと比べると、日本寺は荒廃していたと言われるものの、破壊行為を行う神官のいるべき神社が、山頂付近の小さな浅間神社しか存在しないのが不思議である。『千葉県史』でも日本寺周辺の激しい廃仏毀釈、例えば神社への改称や寺院の破壊などの動きを全く記していない。日本寺荒廃の理由・背景を調べる必要があるものの、現在のところ、日本寺における廃仏毀釈の中での石仏破壊はなかったと考えるしかない。

しかし、依然不思議なのは首の折られ方である。2012年度論考では、藤岡市七輿山古墳の円墳中腹にある羅漢像や墳丘上にある釈迦三尊の石仏について、首を折るというより鋭く斬ったというべき痕が残ることを指摘した。日本寺の羅漢像も、折った痕と斬った痕と見られる二種類が存在する。この違いを検討するには、石仏の首を折るという行為が民衆にとってどう思われたか、石仏の存在意義や人々の心情を探る必要がある。

#### 4. 神奈川県における石仏破損 ～秦野市の道祖神と、平塚市の地藏菩薩～

これ以降は、日本寺の五百羅漢像を離れて、神奈川県における石仏の状況に関して考察したい。五百羅漢と似た江戸時代からの石仏であるので、詳細の分かるきわめて重要なデータとして紹介する。まず、秦野市において道祖神像について詳しい調査をした、前出の小川直之「斬首の民俗 廃仏毀釈と石仏」のデータである<sup>14</sup>。

##### 秦野市の道祖神は4割も破損している

小川は、1970年代半ばから平塚市と秦野市において石造物の調査を精力的に行ってきた。その中で「頭首が失われている石仏が相当数あることがわかってきた。」「数が多く、しかもどう見ても人為的に首から上、あるいは胴から上を欠き落としたり、削り落としたりとし

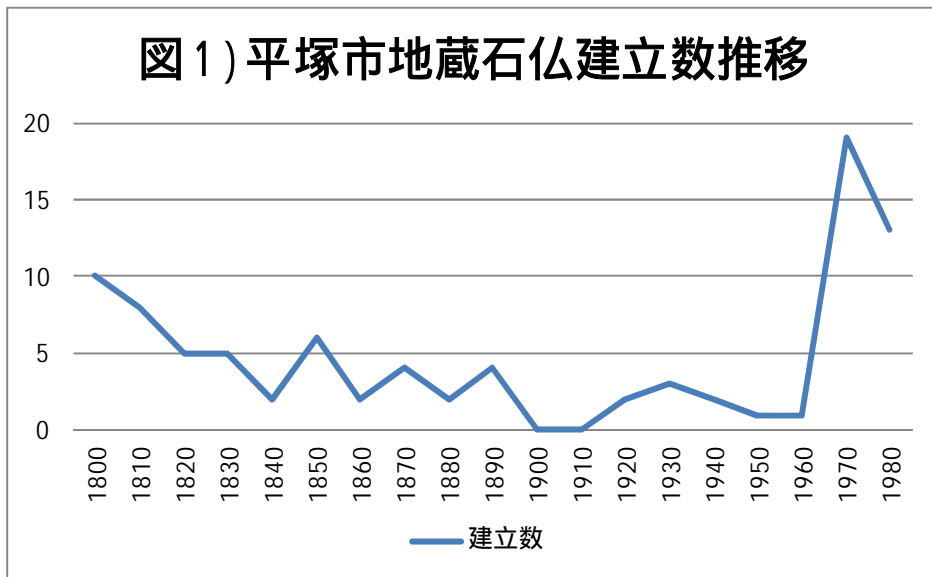
<sup>14</sup> 前掲『歴史民俗論ノート 地藏・斬首・日記』pp31,33-38

か思えないものが多くあった。」「頸部が細くなった丸彫像の石仏の場合は、移動時などに頸部が折れ、頭首部が失われたことも考えられるが、舟型石仏の場合は、彫られている像の頭首部が不可抗力によって折れることは考え難い。」秦野市にある舟型石仏の一種である道祖神石塔を調べると311基あり<sup>15</sup>、一村当たり9基で周辺市町村と比べても非常に多い<sup>16</sup>。市内の庚申塔127基や地神塔88基と比べても多い。半分ほどは建立年代が分かり、建立の増えるのが1700年代後半から1800年代半ば、江戸時代後期であり、羅漢像の建立と同時期と言ってよいだろう。明治以降のものは57基、39%である。

311基の内、181基は男女が彫られた舟形石塔、双体道祖神であり、この中で何らかの破損のあるものが68基、38%となる。内訳は、首折れを修復したもの45基、胴が折れて修復したもの6基、頭首か胴より上が失われたもの4基、縦に二分されたもの2基、双体像の一体の顔がないもの5基、双体像の顔面か胴部が削られたもの6基である。頭首部がきれいに削りとられたと見える秦野市堀西の道祖神もある。この内建立年代が分かる16基で時期を調べると、大正・昭和期が2基しかない。このデータからは理由が「廃仏毀釈ではなからうか。」しかし、史料の裏付けはとれない。ただし、埼玉県の史料によって、道祖神や庚申塔、地蔵菩薩、馬頭観音などが排除対象とされていたことが分かる。

これに関連して、小川「地蔵信仰の諸相」の平塚市内の調査も紹介しておこう<sup>17</sup>。1994年に調査の終わった石仏は総数2056基、約40種。この内、地蔵菩薩が312基、道祖神234基、庚申塔165基である。地蔵菩薩は、丸彫型が209基、舟型75基、地蔵を浮き彫りにした櫛型塔7基など、また立像が173基、座像58基である。建立年の分かる164基の内訳は、17世紀後半18基、18世紀前半30基、後半25基、19世紀前半31基、後半17基、20世紀前半8基、後半35基と推移しており、現在も水子地蔵を中心に建立が続いている。小川は指摘していないが、現在の方が建立年は明確だろうから、現在の建立数を過大評価することができないものの、地蔵信仰がなくなっていないことは分かる。また、「明治以降

は、...廃仏毀釈の影響を考えざるを得ないし、昭和初期以降は戦時体制下での心意状況を考えさせられる」と述べる<sup>18</sup>。しかし、建立年代順に掲載された地蔵石仏の表より、



<sup>15</sup> 秦野市立南公民館道祖神調査会編『秦野の道祖神・庚申塔・地蔵塔』秦野市経委員会、1989年に詳しいデータあり。

<sup>16</sup> 元々道祖神は、長野、群馬、静岡、山梨、神奈川の5県で90%を占める。(『道祖神信仰史の研究』)

<sup>17</sup> 前掲『歴史民俗論ノート 地蔵・斬首・日記』pp3-30

<sup>18</sup> 前掲 p14

1800年から十年ごとに順に建立数を数えて表示すると前頁のグラフとなる。ここから1900年代から1960年代まで低迷期の続いたことが分かり、このデータは廃仏毀釈や戦時体制下での心意と地蔵の建立が、むしろ無関係であることを示していると考えべきである。

#### 供養やご利益のために石仏が建立される

重要なのは、銘文から分かる建立意図である。「17世紀半ばから18世紀半ばすぎにかけては、地蔵建立が念仏回向と結びついて積極的であった」。庚申講中と結びついたものも多い。元禄期(1690年代)から六地蔵の建立が始まり現在まで69基あり、有力者が施主の場合が多い。水子地蔵は供養が目的である。それとともに様々なご利益が説かれている。石仏は全体として17世紀半ば以降に建立されることが多い。地蔵に関しては堂宇の存在を考えねばならず、村持や村民持、寺院持の形で維持される。「室町時代からの地蔵信仰の高まりの中で堂宇が建てられ、そして江戸時代前期から石仏の地蔵も建立されていった」と推測できる。羅漢像も同様に供養目的が考えられるが、地蔵菩薩はご利益目的もあることや管理者が村であるなど意味合いの違いがある。平塚市の地蔵信仰など神奈川県石仏への信仰の高まりと比べると、南房総エリアは六地蔵が6ヶ寺しかないようなので<sup>19</sup>、安房地域のこうした状況が羅漢像の首をとるとご利益があるという俗信と関連するのかもしれない。

#### 道祖神の破損と地蔵菩薩の破損

先の論考で小川が道祖神の破損を取りあげながら、平塚市の地蔵菩薩に言及していないのが不思議である。全国的に首折れ地蔵が非常に多いことから見て、平塚市もそれなりの破損があったはずである。破損状況は現場の写真から判断できるはずなので、平塚市の地蔵が秦野市の道祖神と同様の破損状況であれば、何らかの言及をしていたはずである。とすると、破損状況は秦野市のような4割に近いものでなかったと考えられる。この破損した比率の違いについて、その理由を考えてみよう。

まず、道祖神が4割も破損していることから、廃仏毀釈を理由と推定してよいのだろうか。小川は大正・昭和建立のものが1割であったのを根拠にしているかに見える。しかし、それはむしろ、新しく造られたものは壊れにくいことを示しているのではないか。また、廃仏毀釈で石仏を壊す動きは、若干の史料にそれを示唆するものがあり、事件数が少ないものがあったに違いない。しかし、その場合は、神官が集団をつくって行動するか、村民をまとめて明確な行動指示を出したと考えられる。とすると、香取神宮などのように、敵対する寺院に行動が集中するはずである。秦野市全域に広がって置かれていたはずの、道祖神を壊して回るような行動があったとは到底考えられない。

さらに、道祖神は厳密に言えば仏像でない。男女の交わりを連想させるため、廃仏毀釈の対象とされたことは事実だろうが、首などを破壊することが羅漢像などの本当の石仏より徹底されたとは考えにくい。こうした分析から、秦野市の破損状況のデータは、破損が廃仏毀釈に起因するものでないと強く示唆すると考える。また、堂宇内に置かれた地蔵菩薩の破損が少ないのは、外に置かれた道祖神と比較するとき、雨水などの影響が少なかったためとも言えないだろうか。

<sup>19</sup> <http://www.cityfujisawa.ne.jp/~kanehori/diary/20020324/index.html>



## 5. 廃仏毀釈以外の人為的破壊や十年間の破壊

なぜ廃仏毀釈を理由としてあげる人が多いのか。それは廃仏毀釈について十分な情報がないことと、百数十年の時間がどれだけの石仏を痛めるか想像できないこと、さらに一般人が石仏を壊すことは普通考えられないからである。それは正しい。しかし、世の中には普通でない人たちが若干存在しているのである。そうした人たちがたまたま破壊行為を行うことが続いて、明治の廃仏毀釈から百数十年もたったら意外なほど破壊されるのではないか。いくつかそうした破壊行為の事実を示してみよう。(施線は引用者)

罰当たりな...石仏倒され6体破損、少年2人逮捕 / 2010年12月3日『読売新聞』  
宮崎県新富町上富田の観音山公園で、遊歩道脇の石仏が破損したり、倒されているのを住民が発見。高鍋署は2日、児湯郡内の17歳と15歳の無職少年を器物損壊容疑で逮捕した。...2人は11月25日午後4時頃、公園の石仏23体をけり倒すなどして損壊させた疑い。「遊びでやった」と供述しているという。...129体の内、23体が台座から倒され、うち6体が割れるなどしていた<sup>20</sup>。

地蔵、また被害 同一犯の可能性も / 2010年06月27日『朝日新聞』埼玉版  
13日に落書き被害にあった美里町と本庄市の寺の地蔵が、再び倒されたり壊されたりしたと26日、県警が発表した。...美里町関の長勝院では6体の地蔵が参道に並ぶ「六地蔵」のうちの1体が倒されていた。また本庄市西五十子の不動寺では、山門脇の六地蔵のうち3体が倒されていた。いずれの寺の地蔵も、倒れた衝撃で首がとれたとみられる。地蔵は石でできた台座の上にセメントで固定されており、本体の表面に破損がないことから、何者かが手や足で強く押したとみられる。...県北地区では13日に本庄市の成就院で石仏10体が落書き被害にあったほか、15日には熊谷市の円福寺の地蔵が、顔に塗料をつけられたり、首を折られたりしていた。

開発埋もれ話(2) 行き場ない神仏救う / 2007年6月7日『読売新聞』多摩版  
弁天様、お稲荷様、お地蔵様……。多摩市の多摩モノレール多摩センター駅近くの高台の一角に、石仏や小さな石のほこらなどが寄せ集められている。いずれもニュータウン開発によって行き場を失った神仏だ。...「お地蔵さんや墓石が溝に大量にごろごろと廃棄され、見ていられなかった」。同市豊ヶ丘の寺院、吉祥院住職の津守弘範さん(71)は造成中だった同市諏訪地区のかつての様子を思い起こし、表情を曇らせる。廃棄された地蔵や墓石には、東北地方の地名などが記されていた。60~70年代に未曾有の規模で進められた多摩ニュータウン開発。この時期には、全国各地で大型開発が行われていた。「開発業者が、邪魔になった地蔵や墓石を、多摩に捨てに来た」と津守さん。「身元」が判明した場合は送り返した。その量は4tトラックいっぱいになったという。同市唐木田の区画整理事業では、250年前に作られた六地蔵径12体が行き場を失い、92年に吉祥院に運び込まれた。いずれも首から上が失われていた。今、それらは同院前に並んでいる。津守さんは「すべての仏様を受け入れるのが信心だ」と話す。

<sup>20</sup> <http://daninews.exblog.jp/13748086/>

「若沖の羅漢」無残 伏見・石峰寺 30体倒され / 2007年5月25日『京都新聞』  
江戸時代中期の画家伊藤若沖ゆかりの京都市伏見区の石峰寺の境内裏山で、若沖が下絵を描いて作らせた石像の地蔵菩薩約30体が倒され、うち5体が損壊していたことが24日までに分かった。…高さ30 - 50センチの地蔵約80体の内、30体がなぎ倒されているのが見つかった。5体は上部と下部が2つに割れていたという<sup>21</sup>。

軽井沢で相次ぐ石造物損壊 町指定文化財が被害 / 2003年12月5日『読売新聞』  
軽井沢町では11月中旬から、道路脇や神社の石仏、石塔、灯籠、祠といった石造物が倒され破損する被害が続いており、軽井沢署は器物損壊の疑いで捜査している。…発地地区の「石仏群」は14点が倒され、胴が割れたり首が欠け落ちた。江戸中期の物もある。旅の安全を願い、古い街道沿いに散在していたのを二か所にまとめて移転、保存していた。また、追分地区の「分去れ」にある小公園で保存していた勢至菩薩二体と石塔一基も台座から倒され、勢至菩薩一体は首が折れた。

最近十年でこのくらいのニュースが流れている。地方版にしか流れないような小さな事件なので人々の記憶には残りにくい。実際には、警察沙汰にならない事件がもっと無数にあるはずである。世の中には憂さ晴らしで「人」に当たり散らす乱暴者がいるのである。年月がたって劣化しているのに、乱暴者が蹴ったり倒したりすれば石仏は簡単に壊れる。そして、他方で、開発などで壊され棄てられた石仏を、保護したり修復したりしようとする人々、捨てられた石仏を引き出して並べ直す人々も存在するのである。それが の記事である。最後に、もう少し全体の状況がわかる記事も紹介しよう。

失われゆく多摩の野仏 相次ぐ破損・盗難 比較写真で訴え 多摩石仏の会 10周年記念し保護へ / 1977年2月23日『朝日新聞』東京版  
…この十年の歳月の中で、写真を撮っておいた野仏がなくなったり、壊されて見る影もないのが多数ある。同会では発足十周年を記念して五月に八王子大丸で「多摩の石仏写真展」を開くが、同展で糞写した野仏の写真や破損面と破損された現代の野仏の比較写真なども展示、野仏の保護を強く一般に訴える。失われた野仏は…数十体ある。この十年間に首や胴が折られるなど破損された痛ましい野仏は数知れないという。

この記事は決定的である。比率や数が示されていないものの、わずか10年の間に多摩石仏の会の会員が活動するほぼ同じ地域で、石仏が「石仏ブーム」の中で盗まれ、あるいは数多く破損していたことが分かるのである。百年という長い時間の中で野に置かれた石仏が弱体化し、暴力や開発など人為的な破壊行為も加わって、想像以上の比率で首折れなどの破損が起こったことは間違いない。つまり、具体的な史料や証拠ない中で簡単に廃仏毀釈を理由にすることはやめるべきである。

今後の研究課題は、石材の質や形態、気候的条件など、石仏が壊れていく化学的物物理的条件の研究も含めて、各地域における信仰や習俗の状況から分析を深めることである。

<sup>21</sup> <http://www.asyura2.com/07/nihon24/msg/618.html> これは7月3日の記事で、近所の小学6年と4年の兄弟が「自分たちがやった」と寺に名乗り出たと報道された。